

空飛ぶオペレッタ

—— P. リンケとベルリン・オペレッタの誕生 ——

水 野 光 二

1

ベルリンで当時大変な議論を巻き起こしていた 20 世紀問題は、結局、ときの皇帝ヴィルヘルム二世の布告により、1900 年 1 月 1 日をもって始まる、ということで決着した。一方のウィーン——その前年 1899 年 6 月 3 日にはあのヨハン・シュトラウス（息子）が亡くなったばかりか、12 月 31 日にミレッカーも亡くなってしまふ。オペレッタの世界は、まさに新たな世紀の到来を目前にして、後に金の時代と呼ばれる一時代を支えてきた両巨匠が天国への旅路についてしまったことによって、ついに終止符が打たれたかと思われたこの 19 世紀最後の年 1899 年、話はここから始まる。

この年の 5 月 1 日、ベルリンの街のあちこちで労働者が祝杯をあげているメーデーのこの日、まさにツィレの絵か、写真にでも出てきそうなベルリンの下町から、三人の男と一人の女、都合四人のベルリンっ子をゴンドラに乗せた特急気球が、月を目指して飛び上がっていく。勿論実話ではなく、ここに扱うオペレッタの中での話ではある。ウィーン・オペレッタが世紀末に至ってついに創作の泉を涸らしてしまうのかと危惧されたこの 1899 年こそは、実はベルリンに新たなオペレッタがうぶ声をあげた記念の年でもあった。やがてその芽が花を咲かせ、急速な経済発展、技術革新、周辺地域からの急激

な人口流入によって大いに活力溢れる街となっていたこの新興大都会ベルリンにもようやく独自のベルリン・オペレッタなる世界がつくられることになったのである。

他方、レハールの《メリー・ウィドー》の大当たりによって、ウィーン・オペレッタ界も息を吹き返し、銀の時代が幕を開けることになるが、それはなおこの数年のちの1905年の暮れになってからのことだった。実際、銀の時代と称されるものは、たとえばレハールにしても、後年の代表作のいくつかはベルリンで初演しており、またR.シュトルツも一時期活動の拠点をベルリンに置いたように、ウィーンとベルリンという二つの帝都を中心に、互いに刺激しあう形で創作活動を活発化、花を咲かせた時代だった。

勿論初演の舞台がベルリンに置かれたからといって、レハールの作品をベルリン・オペレッタと呼ぶことはしない。ベルリン・オペレッタは、ベルリンの人々が登場するベルリンの街を舞台とした作品のことだからである。その嚆矢とされるのがパウル・リンケのオペレッタ《月の女神ルーナ夫人》である。

最初にわが国ではあまり知られているとは思われない作曲家パウル・リンケのことから始めよう。P.リンケは1866年11月7日生まれ、まさにシュプレーの水でうぶ湯をつかった（洗礼をうけた）生粋のベルリンっ子だった。オペレッタ《月の女神ルーナ夫人》のフィナーレを飾る〈それがベルリンの空気ってもんなのさ〉が作曲されてから100年を祝う2004年5月には、パウルが両親と同じく洗礼を受けたクロイツベルクのヤコービ教会で、《ルーナ夫人》の記念公演が行われた。オペレッタ初演の年と計算が合わないことについては後述するとして、いかに今もって作曲家P.リンケがベルリンの人々の敬愛を集める存在であるかがこのことから分かる。

ところで、19世紀末のベルリンには自前のオペレッタと呼ばれるような作品はまだ生まれてはいなかったが、勿論オッフェンバックも、ウィーン・オペレッタもいち早く上演されてきたし、そうした公演の場を提供する劇場

も、パリやウィーンに比して決して勝るとも劣らない数をほこってはいた。なぜ自前の作品が生まれなかったかについては、シュナイデライトは、社会的なサポートがこの街に欠けていたことを理由に挙げている。劇場主は一幕物のレビュー形式の出し物を主流とし、ロングランを期待するよりは、たえず新しい趣向を繰り出すことで、客を集めていたのである。

そもそもオペラの場合と異なり、歌と歌のあいだをせりふでつないでいく形のオペレッタでは、曲順を変えることも、曲目を増やすも減らすも変幻自在、どちらかと言えば、きらびやかな舞台、華やかなバレエを中心に、さわりに歌をはさみ、あとは芸達者な役者のせりふまわしに任せたほうが、出来栄えとしては安定するわけで、客の受けもよい。実際今でも名の知られたオペレッタ作品の公演で、構成に手が入り、ときに曲目の一つや二つが抜け落ちたり、逆に別のオペレッタ作品からの曲を挿入したりするといった上演方法は珍しいことではない。要するに、適度な換骨奪胎、これは目くじらを立てるほどのことはないオペレッタの世界としては自然な受容法なのだ。

リンケの話に戻ろう。パウル・リンケの父はベルリン市庁の職員（Magistratsdiener）を仕事としていた。正式には軍曹という肩書きを持っていたというので、市に雇われた軍人というような役どころなのだろうか。音楽の才があったらしく、小さなオーケストラでバイオリンを弾いてもいた。しかし、出征先のフランスで罹患した黒死病がもとで、家族は幼くして父を亡くし、その後は兄、姉、パウルと三人の子供は母親一人の手で育てられる。パウルの子供の頃からの夢は、軍楽隊のメンバーとなることだった。母がその夢を応援してくれ、パウルはベルリンを離れ、ヴィテンベルゲの市立オーケストラに音楽修行に出ることができた。そこでファゴット、バイオリンを習ったのだが、ベルリンに帰ってきたものの夢は実現できなかった。身体上の問題（背が足りなかったとか、胸囲が不足したとか書かれている）で軍楽隊が受け入れを認めなかったからである。やむなく生活の糧を得るためにアルバイトを転々とした後、ツェントラール劇場でファゴット奏者として受け入れら

れ、音楽家としての第一歩を踏み出す。その後 1885 年にオストエント劇場、1887 年から王立劇場、そして 1890 年からはパロディ劇場、1892 年にはベル・アリアンス劇場と渡り歩き、ファゴット、時にはバイオリン奏者として、また、コレペティの仕事や指揮者、はたまた即興の作曲者などなどの仕事をこなし、実践を積み重ね、少しずつ後のオペレッタ作曲家として必要なノウハウ、経験、経歴を積み上げていき、1893 年アポロ・ヴァリエテ劇場では、27 歳で初めて第一指揮者として迎えられたのである。

大都会のヴァリエテでは座付き指揮者が歌い手に新しいクーブレを作曲することは珍しいことではなかったようだ。しかも、パロディ劇場での活動は評判を呼んでいる人気作品をいちはやくパロディ化して上演していたわけで、こうした世界では作品も作曲家、リブレリストによる独自の固有な世界表現とみる考えは薄れ、パッチワークのように自在に組み替えられていたものと思われる。ちなみにベナツキーのオペレッタの代表作《白馬亭》も、実際は興行主シャレルの作品と呼ぶのがふさわしいほどのもので、ベナツキー以外に R. シュトルツ、R. ギルバート、グラニヒシュテテンといった当時のそうそうたる人気作曲家がそれぞれに分担して曲をつけて出来上がったものだった。要は舞台の仕上がり具合。大衆娯楽の世界では客にいかにも喜んでもらえるか、受け入れられるかが、ライバル劇場に打ち勝つために最も重要視されたことだった。と言うか、20 世紀に入れば、ライバルとしてトーキー映画も登場する時代なのだ。オペレッタの武器が小さな街にいても舞台をこなす自在さ、身軽さにあったとすれば、トーキーでは、どんな片田舎でも大都会と同じようにディートリヒが歌い、踊り、客に微笑みかけてくれるのだから。

ところで、ではなぜ P. リンケがベルリン・オペレッタの生みの親と呼ばれることになったのか。これは、実際のところ、偶然がもたらしたものと言えなくもない。シュトラウスの場合、オッフェンバックに直接勧められ、しかも苦勞してようやく第 3 作となる《こうもり》が大ヒットした事情と比べ

ると、いささか面白い。

ことの次第はこうである。リンケはこの以前からも一幕物のオペレッタはいくつつくっていた。1897年に《地上に降りたヴィーナス》という一幕オペレッタを舞台にかけ、その後アポロ・ヴァリエテ劇場の仕事に区切りをつけ、2シーズンの期間、パリのフォーリー・ベルジュールに身をおく。いわゆる音楽留学。しかし、その間、故郷ベルリンでおこっていたことは。かつてのツェントラル劇場の支配人、シュルツがベーレン街にあったウンター・デン・リンデン劇場を買い取り、1898年9月3日に新たにメトロポール劇場と名を変え、フリードリヒ街のアポロ劇場に挑戦を挑み始めたのである。勿論立地条件としてはメトロポールのほうがよい。アポロを打ち負かすためには手段を選ばぬとばかりに、シュルツは破格の金で、当時人気の喜劇役者ギイド・ティールシャーを引き抜いてきた。《女たちのパラダイス》の公演では専門誌に、メトロポールは連日満員札止め、この勢いなら200回公演は超えるだろうとさえ書かれた。そして、1899年には更にティールシャーをからめたベルリン物を舞台にかけて、アポロをぎゃふんと言わせる鼻息にある、という話が伝わってきたのだ。このメトロポール劇場の《笑い溢れるベルリンの街》は6月1日が初演と予定されていた。あからさまに次々と挑発を仕掛けられてきたアポロ側も、いつまでも指をくわえてみているわけにはいかない。ここはなんとしてもリンケにパリから戻ってもらい、助けてもらうしかない。かくして98/99年の冬のシーズンが終わる前にパウル・リンケはフォーリー・ベルジュールを辞し、1899年2月にベルリンに戻ってきた。

メトロポールに対抗するアポロ劇場側は、すでに新しい演目の初演をひと月早い5月1日と決めていた。作曲を任されるリンケにとってわずか数ヶ月しかない日程だった。出し物は、どうやらリンケの年来のパートナー、リブレリストのボルテン・ベッカーズがすでに冬から準備してきていたようだった。パウルがパリに出発する前に、アポロで最後に公演したのが天上からヴィー

ナスが地上に降りてくる話だったし、今度は、こちらから月へ旅行する話が良い。しかも、メトロポールがベルリン物で挑発してくるわけだから、こちらは、月に旅立つ連中は勿論ベルリンっ子にしなくてはなるまい。

こうして大急ぎでつくられたオペレッタ《月の女神ルーナ夫人》は、勿論当初一幕物であったし、ここに登場する月の女神ルーナは、前作でヴィーナスが歌っていた

そうよ、わたしが愛の女神、ヴィーナスと申します

をためらうこともなく、中身を変えてこう歌う。

そうよ、わたしが月の女神、ルーナ夫人と申します

しかし、思いのほかこのオペレッタが当たったのである。5月3日の『ナチオナル紙』は「アポロ劇場は夏シーズンのオペレッタ《月の女神ルーナ夫人》で大成功を収めた。このファンタジー狂言（ブルレスク）の筋にはさして語るべきものはないが、それはまた事の本質でもない。舞台装置、照明効果のメルヘンチックな豪華さ、並びに多くの心をときめかせるクープレ、リートを持った軽やかで、多彩なメロディーに溢れた音楽——これは座付き作曲家で、舞台指揮者でもあるパウル・リンケの作曲による——それらがこの楽しい小品の魅力をかもし出しているものであり、おそらくアポロ劇場の舞台に長く同じような成功をもたらしていくことだろう」（シュナイデライト『パウル・リンケとベルリン・オペレッタの成立』からの引用）と伝えている。

ちなみに、この初演の様子を報じたほかの記事もあるが、いずれの評も5月3日の日付になっており、それを根拠にして——と思われるが——このオペレッタの初演を5月2日とする解説もある。しかし、シュナイデライトに

は、4月30日に『ナチオナル紙』に掲載された広告が転載されており、そこには、5月1日初演と書かれている。ただ、悩ましいのは、パウル・リンケ自身が監修、刊行している全曲版ピアノ・スコア（図5）には、初演が5月2日とされており、この疑問は未解決である。

《ルーナ夫人》はアポロ劇場で連続600回を超えるロングラン公演を果たし、支配人ヴァルトマンは自分が中央に、両脇に二人の作者を配した記念はがきを印刷させたほどであったという。このロングランの間にも、同年12月31日に、オペレッタはいささか拡大され、2度目の初演を迎え、更に1922年になって、作品は二幕物に改変され、ほぼ今日みられる形になる。そのときに1904年公演作品《ベルリンの空気》からのいくつかの曲が組み込まれたのである（それ故に2004年という年は、たしかに作品のフィナーレを飾る〈ベルリンの空気〉が作曲された年からみれば、100周年であることも間違いない）。リンケは後年このオペレッタについて、こう述べている：「わたしは〈ルーナ夫人〉では軽やかなリズムを真にベルリンのエレメントとして、ベルリンのどこか大胆なプロジェクト精神といったものを舞台にかけました……しかし、《ルーナ夫人》のなかにあるこのベルリン的なものが、ながく考えぬいた末の結果であるとか、まして思惑がらみのことだったなどと受け取ってはいけません。事実全くその逆で、わたしはいつだって着想が浮かぶままにメロディーを譜面に移しただけです。それがベルリン・オペレッタの誕生となった理由は、おそらくもとよりわたしが身も心もベルリンっ子だ、ということにあるのでしょう」（シュナイデライト『パウル・リンケとベルリン・オペレッタの成立』からの引用）。

しかし、すでに先ほどから舞台の始まりを告げるベルが鳴り響いている。われわれもそろそろ中に入って、席に着くことにしよう。

2

第 一 幕

機械工のフリッツ・シュテプケは自室の屋根裏部屋から屋上に出て、風向きを調べている。自ら設計して造った成層圏特急気球に乗って月にむけて飛び立つ機会をうかがっているのだった。友達の仕立て屋のレンマーマイヤーが下の屋根裏部屋で、彼のために仕立てた船長服にアイロンをかけている。(Nr. 1 Duett – Steppke/Lämmermeier: 〈Es ist was Wunderbares ums Genie〉)

しかし月に行こうなんてたわごとで夢中になるような間借り人はここには置いておけない、と家主のプーゼバハ夫人からシュテプケは立ち退きを言い渡されている。プーゼバハはそもそもある夏の新月の夜に、グローサー・シュテルンでテオフィルと名乗る男と出会い、すっかり心を奪われてしまったが、ブランデンブルク門のところであっさり捨てられてしまった、という苦い思い出があり、男が信用できないのだ。(Nr. 2 Lied – Pusebach: 〈O Theophil!〉) 現在いいなずけの年金生活者パンネッケが、仲良し三人組のシュテプケ、レンマーマイヤーと一緒に自分のもとから去ってしまうなど、彼女としてはなんとしても阻止しなくてはならないことなのだ。そのプーゼバハの姪このマリーはシュテプケと恋仲、しかし、彼の計画にはおば以上に反対している。シュテプケに食事を運んできたマリーは彼に計画を断念して、といさめる。(Nr. 3 Lied – Marie: 〈Schlösser, die im Monde liegen〉)

マリーのリート 〈月のお城なんて悩みを生むだけよ、あなた〉

くもりのない眼で、楽しいまなざしであなたの周りを見渡してみても
 そうすれば世界もあなたに微笑を返してくれるはずだよ
 ばかげた考えに取りつかれても、何の足しにもなりはしないわ

運命がそれで変わるというものでもないでしょ
 どんなものかわかりはしない遠くの世界につばしろうなんて
 鬼火のまぼろしにつられて危ない目にあいにくようなもの
 あなたを愛している人がいるところに踏みとどまってちょうだいよ
 あなたを愛している人がいるところが、あなたには幸せなのよ

月のお城なんて悩みを生むだけよ、あなた
 幸せになるためには、地上にあなたの居場所はあるものよ
 月のお城なんて悩みを生むだけよ、あなた
 幸せになるためには、地上にあなたの居場所はあるものよ

シュテプケは彼女への愛に悩み、いったんは計画の断念を約束するものの、マリーがおやすみを言って、部屋から出て行くと、船長のユニフォームにどうしても一度袖を通してみたいと、鏡の前に立つ。計画の実行とマリーへの愛のどちらをとるべきか、悩み、ソファーに身を横たえるうちに、シュテプケは眠り込んでしまう。

夢の中で、月が窓から光を投げかけ、彼に合図を送っているかのような気がする。そこに月旅行の同行予定者、レンマーマイヤーとパンネッケがやってくる。彼の心はやはり抑えることは出来なかった。三人は屋根伝いに、プーゼバハ夫人に見つからないように出て行く。(Nr. 4 Terzett—Steppe/Lämmermeier/Pannecke: <Leise nur, leise nur!>)

悪い予感がしたプーゼバハが様子を見に来ると、すでにもぬけの殻。マリーを連れて大急ぎで三人のあとを追う。男たちが今まさに特急気球のゴンドラに乗り込もうとしているその時、追いついたプーゼバハはパンネッケを引きとめようと必死になるが、気球はすでに上昇を始めている。なわばしごにつかまったプーゼバハは無事ゴンドラの中に運び上げられる。下で泣いているマリーは、ひとり地上に取り残されてしまうのだった。

場面変わって、月の世界。プーゼバハを欺いたあのテオフィルが月の大切

な仕事、岩磨きを監督、取り仕切っている。(Nr. 6 Chor der Mondelfen und Auftrittslied des Theophil: 〈Schnell, putzet fein rings das Gestein〉) 目下テオフィルは月の女神ルーナの腰元シュテラを愛している。理由は、「彼女には預金通帳があり、我輩には借金がある」(シュナイデライト版による)からだ。(Nr. 7 Duett—Stella/Theophil: 〈Schenk mir doch ein kleines bißchen Liebe〉)

さて、ベルリンからの四人が月に到着する。(Nr. 8 Ensemble: 〈Im Express-Ballon〉) しかし、月の世界も地上と変わらぬ人間模様であることに一同は幻滅を味わう。テオフィルはよそからのこの月への侵入者、三人の男をすぐさま逮捕させてしまうが、プーゼバハに、即刻釈放しないと、あんたのことで大スキャンダルをおこすわよ、と脅かされ、しぶしぶ言うことを聞くと約束させられる。そこにルーナ夫人に以前から求愛しているシュテルンシュヌッペ王子がやってくる。(Nr. 10 Lied—Prinz Sternschnuppe: 〈Lose, muntre Lieder〉)

第 二 幕

あたりにすでに夜のとばりが落ちている。(Nr. 12b Chor der Mondelfen und Sternbilder: 〈Wenn der Abend niedersinkt〉) 月の女神ルーナ夫人がきらびやかなサロンに今宵も訪問客の星々を出迎える。(Nr. 12c Auftrittslied der Luna: 〈Laßt den Kopf nicht hängen〉)

ルーナ夫人登場の歌 〈くよくよ頭をうなだれてはなりません〉

おとき話じゃ月に住むのは男というのが相場だそうですが
残念、本当は陽気な未亡人
雲に囲まれ、差配してますの
まわりはみんな王侯暮しの愉快的な生活
そして私は陽気な未亡人、ルーナって申します

いつだって、私のまわりは洒落と明るい気分に包まれてます
 いつだって、私のまわりは洒落と明るい気分に包まれてます
 洒落と明るい気分にな

くよくよ頭をうなだれてはなりません
 みなさま、どうかご陽気になさいませ
 楽しい音楽に合わせて
 輪になって踊りましょう
 生きてることを楽しんで
 それが賢い、知恵のあること
 悔やむなんてまだまだ
 ずっと先のことになさいませ

そこに現れたシュテルンシュヌッペ王子に、今度もまた求愛されるが、これまで同様ルーナ夫人は肘鉄をお見舞いする。(Nr. 13 Duett—Luna/ Prinz Sternschnuppe: 〈Wenn die Sonne schlafen geht!〉) そこに、ルーナにベルリンからの訪問者たちのことが知らされ、ここにお連れしなさい、と命令する。三人の男を出迎えるルーナ夫人。(Nr. 15 Großes Ensemble und Lied der Luna: 〈Von Sternen umgeben〉)

ルーナのリート 〈星々に囲まれ〉

星々に囲まれ私が
 大空のふんわり柔らかな織物で世界を被うとき
 妖精たちが目をさまし、私の輝きを優しく味わい
 洒落と笑いでみなさまを踊りに誘います
 愛に身を焦がしたいとお望みの人々から敬愛を集めております
 そうよ、わたしが月の女神、ルーナ夫人と申します
 そうよ、わたしが月の女神、ルーナ夫人と申します

ルーナ夫人はことのほかシュテプケが気に入ってしまう。そこで夫人は彼を閨房へと誘う。そこに連れて行けば、シュテプケの心からは、地球に戻りたいという気持ちもなくなってしまい、誘惑の手に陥ること間違いなし、と踏んでいるのだ。(Nr. 18 Sextett mit Chor – Pusebach/Stella/Mondgroom/Pannecke/Theophil/Lämmermeier: 〈Ist die Welt auch noch so schön〉, Text und Musik von Paul Lincke)

六重唱〈この世がどんなに美しくても〉 テキストも P. リンケ

この世がどんなに美しくても
いつかは終わりがくるものさ
だから、歌おう、踊ろう、酒飲もう
そして、その日が与えてくれる幸せを味わいましょう
地球が裂けてしまえば
どっちにしても一巻の終わり
陽気に生きよう、陽気に愛しましょう
後悔先に立たず
氷山と一緒に海の底に沈んでしまう、その前に

しかし、これに嫉妬した王子がプーゼバハ夫人から、シュテプケには地球にマリーという婚約者がいる、と聞きつけ、流星自動車を飛ばして、マリーを地球に迎えに行く。

シュテプケが今まさに月のテラスで月の女神ルーナとキスをしようかというその時、彼の耳にマリーの歌声が聞こえてくる。シュテプケはマリーの腕の中へと飛び込んでいく。月の女神ルーナ夫人は王子の愛を受け入れ、王子に手を差し伸べる。ベルリンっ子たちは再び故郷に戻ることができる。(Nr. 19 Kleines Ensemble: 〈Auf euer Wohl!〉) 気球は壊れてしまったけれど、シュテルンシュヌッペ王子が流星自動車でみんなを地球に送ってくれるのだ。

それは、自分たちが一番幸せでいられる場所。そう、それこそはベルリンなのである。(Nr. 20 Finale: 〈Das macht die Berliner Luft〉)

フィナーレ 〈それがベルリンの空気ってもんなのさ〉

黄色い靴はくお若い子
 坊主、いって、いくつで、と尋ねてみればよ
 小生意気に、てやんでい
 れいねん（来年）にゃはや十になるんでえ、べらぼうめ
 だけど、そいつがママとおでかけのときにはよ
 ふていやつだよ、まったくもって
 電車の車掌に答えてぬかす
 おいら、やっと来年六つつになるのでちゅ
 そうそう、まったく、そうそう、まったく
 だから、それがベルリンの空気ってもんなのさ

3

ここに紹介したのは、戦後 1957 年にシュナイデライトがメトロポール劇場のために、新しく稿を書き改めたオペレッタ《月の女神ルーナ夫人》によって（図 2）—— ちなみにメトロポール劇場は、第二次大戦後ベーレン街からフリードリヒ街（この街に当時アポロが建っていた！）に移り、ベーレン街のほうは今のコーミッシェ・オーバーとなった。アポロはどうやら早い時期に閉館となったようだ。ライバル争いから生まれたともいえるこの作品は、いつしか、そのライバルであったメトロポール劇場で公演されるようになり（図 6）、その後もベルリンの人々を楽しませ続けてくれた。そのメトロポール劇場も、存続を望む多くの人々の署名活動（わたしも署名してきたのになあ）もむなしく、東西ベルリン統一後の財政再建プログラムの中で、

1997年にとうとうアンサンブルそのものが解散されてしまった。

記述のようにオペレッタ《月の女神ルーナ夫人》は最初は一幕物としてつくられ、その後特に二幕に改変されるときなど、最初は入っていなかった曲がその間にいくつか、加えられるという歴史を経て今の形に落ち着いた作品である。著作権の申請年代から判断して、今、わたしに分かる範囲で言えば、確実に初演当初（少なくとも1899年の段階で）このオペレッタに入っていた曲目は、Nr. 3 〈Schlösser, die im Monde liegen〉, Nr. 10 〈Lose, muntre Lieder〉, Nr. 12c 〈Laß den Kopf nicht hängen〉の3曲くらいである。また、Nr. 2 〈O Theophil!〉もかなり初期の段階で曲を付けられている（1901年）。しかし、シュナイデライトによれば、骨格としての筋そのものは、殆ど初演のときと変わらないという。登場人物もしたがって、まったく同じである。おそらく、地上の側の人間、ベルリンっ子仲良し三人組は当初、Stummrolle だったのだろう。

1899年5月にこのオペレッタが初演の舞台を彩っている最中も、パウル・リンケがかつて身をおいたオストエント劇場の広場では、気球が日に何度もお客を乗せては、ベルリンの空高く上がっていたという。この時代飛行は最もベルリンっ子の関心を引いたテーマの一つだった。実は、リンケが在籍していた当時のオストエント劇場でカール・ポーレというペンネームで監督、役者、脚本家として仕事をしていた人物こそは、オットー・リーリエントールその人で、資金を稼いで、飛行機製作の費用としていたのである。残念ながら、彼は実験半ば1896年8月10日墜落事故によって命を落としてしまう（図1）。余計なことながら、飛行の手段として当時考えられていた主流は、空気より軽い物質を利用するというものであった（図3）のに対して、リーリエントールは飛行機が将来性を持つためには、なんとしても、重い金属それ自体の力によって空に舞い上がらせる方法を工夫するのではなければならない、と考えていたのである。成功していればライト兄弟に先んじる道を歩みながらの事故死だった。おそらく、リンケはリーリエントールからその

夢を幾度も聞かされたことだろう。このオペレッタは追悼の意味も込められているのだろうか？ ドイツはその後、大戦に敗北し、革命の混乱を経、黄金の 20 年代と呼ばれる享樂のなかナチスの時代へと突き進んでいく。リンケは、大戦後（第一次）1940 年に《愛の夢》というオペレッタを例外的に発表したほかは、ほとんど創作をすることがなくなってしまう。自らアポロ出版をおこし、もっぱら、その仕事に専念したのである。リンケの明るいメロディーは振り返ってみれば 20 世紀に入って故郷ベルリンがたどった決して明るくはない時代になお、ベルリンっ子たちに、〈くよくよ頭をうなだれてはなりません〉と励ましのエールを送り続けたのである。

4

さて、オーストリアではヨハン・シュトラウス（息子）の〈美しき青きドナウ〉が第二の国歌と称され、またウィーン・フィルのニュー・イヤー・コンサートでは父シュトラウスの〈ラデツキー行進曲〉が聴衆の手拍子とともに演奏されながら終了することは、すっかりわが国でも知られる新年の風物詩となっている。他方ベルリンではパウル・リンケの〈ベルリンの空気〉は、はやくからベルリンの第二の市歌とも言われ、こちらはベルリン・フィル恒例の 6 月に催される Waldbühne 野外コンサートの締めくくりに演奏され、聴衆は待ち焦がれたベスト・シーズンの到来に胸のたかまりを押さえ切れなないように、リンケのメロディーを口ずさみながら、うきうきとした気分で家路につくのである。

そのベルリンの定番の観光みやげとして、今でも「ベルリンの空気」とラベルを貼られた缶詰が売られているのを目にする。手にとって見ればまさしく中身はからっぽとすぐ分かる。人をくったおみやげだ。以前ある日同僚がおみやげとして持ち帰り、私たちは興味津々その缶詰をながめた。勿論これはベルリン一流の洒落をそのまま缶詰にしたもので、本来、決してあけるな

どという野暮におよんではいけないのだろうが、そこが学者の性というものか、好奇心のほうが勝り、はてさて、なにがでてくるかと、息を凝らして缶があくのを待ったものだった。さて、読者は何がでてきたと思われるでしょうか？ 都会の汚れた空気？ とんでもない。勿論そこからはかすかにこのメロディーが漂い始めたと思う間もなく、やがて研究室いっぱいにはそれはひろがったのです。

Das macht die Berliner Luft, Luft, Luft,
so mit ihrem holden Duft, Duft, Duft...



図1 リーリエントールの飛行実験
出典：Wikipedia



図2 ベルリン・メトロポール劇場
《Frau Luna》公演プロスペクト



図3 ベルリンの街を飛んでいく飛行船ヒンデンプルク（当時の絵はがき）

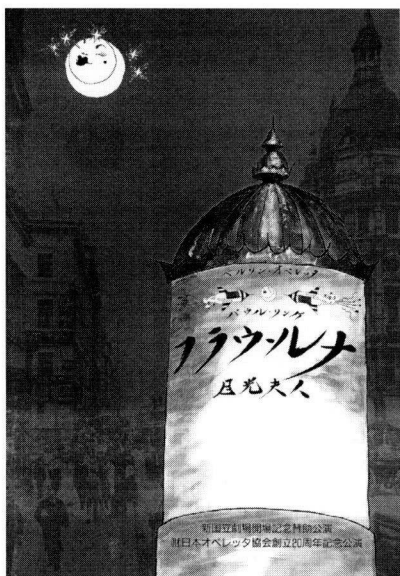


図4 日本オペレッタ協会《フラウ・ルナ》公演プログラム

1998年2月21, 22日, 作品は日本でも初めて公演された



図5 《Frau Luna》全曲版
ピアノ・スコア 出典：Apollo-Verlag



図6 メトロポール劇場での《Frau Luna》公演舞台写真(1938年)

出典：Kultur Fibel Verlag (Webからの転載)

参考にした資料

- Otto Schneidereit, *Paul Lincke und die Entstehung der Berliner Operette*, Henschelverlag Berlin, 1981
- Otto Schneidereit, *Operette A-Z, Ein Streifzug durch die Welt der Operette und Musicals*, 7. Aufl., Henschelverlag, 1971
- Anton Würz, *Reclams Operettenführer*, 20. Aufl.
- 永竹由幸, オペレッタ名曲百科, 音楽之友社, 1999 年

なお、私が持っている《Frau Luna》の全曲版 CD としては、次の二枚があるが、中身は同じである。

- Lincke, Frau Luna – Gesamtaufnahme, Chor und Orchester der Bayerischen Rundfunks, Dirigent: Werner Schmidt-Boelcke, Allegria, (1978 年録音) 2003 年
- Frau Luna, (内容は全く同じ), Acanta

その他パウ・リンケのメロディーだけを CD に収めたものとして、次の 2 枚がある

- Paul Lincke – Unvergessene Melodien, Polydor, (1996 年録音) 2005 年
- Bis früh um fünf, kleine Maus – Altberliner Melodien von Paul Lincke, B. T. Music, (1997 年録音)

マリーのリート 〈Schlösser, die im Monde liegen〉は Lucia Popp による録音があり、いくつかの CD に収録されている。参考までにその一つを紹介しておこう

- Great Moments of ... Lucia Popp, EMI Classics, 3 CDs, Vol. 3, 1995 年

楽譜としては次のものを参考にした

- Frau Luna, Musik von Paul Lincke, Klavierauszug, Apollo-Verlag, Mainz, o. J.
- Paul Lincke, Klavier-Ausgabe, Bd I, Bd II, Bd III, Apollo-Verlag, Berlin, o. J.

その他、ベルリン・メトロポール劇場の《Frau Luna》公演（1993 年, 1994 年）の際のプロスペクト（図 2）、並びに日本オペレッタ協会による《フラウ・ルナ》公演（1998 年）の際の公演プログラム（図 4）を参考とした。

（みずの・こうじ 理工学部教授）